琉球大学学術リポジトリ

農業の生産技術と目標

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学農家政学部
	公開日: 2011-05-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 池原, 真一, Ikehara, Shinichi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19735

よろしいでしよう。

以上さばの料理について述べてまいりましたが、御參考のため、さばの種類、見分け方、冷凍ものについて、少し言いてみましよう。

【種　類】

さばは一年中ある魚ですが、沖縄近海では、三月の初めから六月の終り頃迄と、十月の初めから十二月にかけての二回、最も多くとれるようです。体の表前に「く」の字の縞のあるほか腹部にゴマのような黒い斑点があるのをゴマさば、斑点のないものをまさば（ほんさば）とわけます。又体の形から、ほんさばは平たいのでヒラさば、ゴマさばは形が丸いのでマルさばとも云います。私達が料理するのは大ていの場合ゴマさばです。

【見分け方】

さばはいたみやすい魚で、それほどいたんでいるようには見えないものでも、魚の体内では、いろんな変化が起つているのです。

さばは体特に内臓に強い消化酵素を持ち死ぬと内臓の消化酵素がその身体を分解しはじめます。ですから死ぬと少しの間、死後硬直の状態にいますが、すぐグニヤグニヤとしてしまいます

さばを買う時は、全体に光沢があり、皮の縞目や色がはつきりしていて、眼だまが黒くいきいきとして、身を押して弾力があり、エラが真赤なものを買うことです。買つたら頭とワタを早く出し、塩をするか、火を通しておくこと。なまのままおくのは禁物です。

【冷凍さば】

調理なさる際は、凍つたままなさつて下さい、わざわざ水で溶かす必要はありません。

冷凍魚を溶かしますと、液がたくさん流れ出る事にお気づきの事と思いますが、この液体はドリップとよばれ、魚のうま味の成分とかその他の栄養分がかなり含まれていますので折角の栄養分を逃さないようにしましよう。又、冷凍さばは漁獲してその場で冷凍してありますので、鮮度も落ちていず、味の落ちることもめつたにありません。

（兼島　利枝）

農業の生産技術と目標

一、農業経営の意義

吾々は稲を作つたり甘藷や甘蔗を作つたり或は家畜を飼つたりしているが、それは生産されたものを売つて金銭的の利益をあげ又は家族の生活に直接消費するために行つている。

農業に於いてはこの様な販売又は消費に役立つ価値のある生産物を作ると共に、他方ではそのために労働を投じ、土地種子肥料飼料等の色々の生産手段の価値あるものをきせいにしているのであつて、かかる価値のきせい即ち費用を出来るだけ少くして、有用な価値を出来るだけ沢山生産する様に最も合理的に考えそのために、どういう種類の農産物をどれだけどんな生産手段や労働を、如何に使つて生産を行うかについて考える必要がある。

農家の生産する米や甘藷が農業研究所の試験のための水稲栽培や甘藷栽培と違う点である。

試験所の試験は、その費用という事を余り考えない。よい技術によつて如何に多量の生産があがつても、そのために余り多くの費用を使つたり、又はそれが高いねだんで売れなかつたりしては農家にとつてはその生産は目的にそわず意味がないわけである。この様に技術と経済の両方が稲の両面の様に互に密接にからみ合つているものが本当の意味での農業生産で、この様な農業生産は何等かの経済の目的を達するため一定の土地に各種の生産要素を組合せて一つのまとまつた組織として営まれるのである。

この様な農業生産の組織が農業経営なのである。

稲作甘蔗作等一種類の生産を専門的に行う者もあるが、多くは米作と麦作、米作と甘藷作、甘蔗作と甘藷作大豆作という様に二種以上の農業生産を併せ行つている。　或はそれに家畜が導入されそれがまとまつた組織として行われる限りその組織全体が農業経営である。この様に考えて来ると、農業経営の問題はその目的をうまく達成するためにはどんな成産物を、どれだけ生産するかそのためにはどんな生産手段や労働を如何に使つてやつていくかという事についてえらんで組合はせる問題である即ち、色々な生産の技術をどう組合はせてどんな組織として営んでいくかの問題であり、更にそれには販売、購売、金融の問題が関連してくる。この様な選択組合は、地方により自然的事情又は社会的事情が違うにつれて違う、又同じ地方でも農家により、個人的な事情が違うに従つて、又同じ農家でも時のたつにつれて事情が変化するに応じて変つて行くので皆一様にはいかない。作物栽培の仕方や家畜の飼い方の様に生産の技術は似た条件の下ではそのまま役立ち得る。或る農家が行つているすぐれた稲作技術や甘蔗作りの技術等は、条件の似た農家がそのまま行つてもうまく行く場合が多い。しかし経営の事になるとそう簡単にはいかない。個々の農家は、各々経営の仕方が違う或る農家で成功して相当収益を上げている経営の仕方も、他の農家がそのままねてやつてもうまく行くとは限らない。之は経営に関係する諸事情が同じでないからである。

経営の外部的条件（気候等）が仮に同じであつても、農家の側

の事情例へば家族の数、その中でも特に働き手の数、経営面積の広狭、資本の多少等が違うに従つて同じようにはゆかない。まして之等経営の内外の事情はたえず変化するので、農家はそれぞれの事情に応じて、適当な経営組織を作つて適切に運営して行くことが必要である。

農業経営に於いては経営の具体的事例よりも、それぞれの事情に応じて、如何なる経営を行い又事情の変化例へば子女の出稼或は結婚等により家族の中から働き手が減つたとか、或は長男が嫁をむかえて一人働き手が増えたとか、或は軍用地の開放により耕地面積が増えたとか等によつて、之を如何に変えて行くか、或は更に進んで合理的な経営を行い得る様な条件を如何に作り出して行くかの考え方が重要である。農業経営に機械を取入れたからと言つて経営の改善が必ずしもうまく行くとは限らない。機械の導入は夫々の事情に応じて適切に取入れてうまく行くのである

二、農業経営の目標

純粋の専業農家即ち農業経営だけによつて一家の生計を維持している農家の場合の経営の目標は、「農業所得」（農業総収益から経営費を差引いた額）を出来るだけ多からしめることにある。専業農家に於いても、経営者の経営要素に対する所有関係の異なるにしたがつて、その内容が一様ではない。純粋の自作農即ち土地も全部自作地労力は全部自家労働力の場合には、前記の所得が自作農の農業所得となる。自小作農小自作農小作農等の如く土地の一部或は内部を借り入れて、農業経営を営む農家の場合、或は雇傭労働を使用して経営した場合には小作地に対しては小作料を雇傭労働に対しては、労賃を支払はなければならない。従つて、之等を差引いた残額が農業所得となるのである。

兼業農家、即ち自家の農業経営の外に、兼業を持つている農家の所得は農業所得と兼業所得から成立つている。即ち農業経営からは農業所得が得られ兼業からは兼業所得が得られる。兼業農家はその所有する経営要素即ち土地資本労働の全部を自家の農業経営に使はないで、その一部を以つて農業以外の事業を営むか或は他人の事業に之を貸付け又は労働を売る事によつて兼業所得を得るのである。

日本や沖縄の様に土地が狭く、人口が多く労力の多過ぎる国に於いては、労力を自家農業経営に使い切れないで他に雇はれて兼業収入を得る必要を見る場合がかなり多い。

終戦後日本では兼業農家の割合が著しく増加し、農業経営の担い手としての兼業農家の在り方が注目されている。この様な農家経済の最高の目標は、農家所得を出来るだけ多くすることである。即ち農業所得と兼業所得とを合併したものを最大にするのがその目標なのである。

農業所得を若干減らしても、それによつて、農業経営からうかした自家労力等が、兼業方面に利用されてそれによつて兼業所得を増加する事が出来れば、その方がより合目的である。そこで農業経営の目標は農家所得を出来るだけ多からしめることを前提として、農業所得を最大ならしめる事がその目標となるのである。

（池原　真一）

田畑地籍の簡單な測定法（完）

以上述べた事に依り図面の作成が出来るがその面積も知らねばならぬので面積の求め方（求積法）を簡易な物のみを述べます

第一に三角形及び四辺形の面積計算法

1、三角形の底辺(c)及び高さ(h)を知れば其の面積は次の式で求められる。（第四〇図）

$$F=\frac{ch}{2}$$

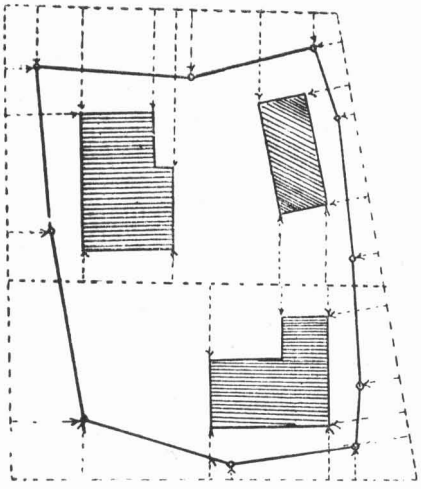
或いは三辺a・b・cを知れば

$$F=\sqrt{S(S-a)(S-b)(S-c)}$$

但し $S=\frac{a+b+c}{2}$

の式で面積が求められる。尚四辺形の求積中長方形、正方形の求積は述べるまでも無い。それ以外の四辺形はその対角線の長さと狭角が判れば求める事が出来ますがむつかしくなるので省略します。

第二に多角形の辺数を次第に少くなくして三角形に直し求積す



第４０図